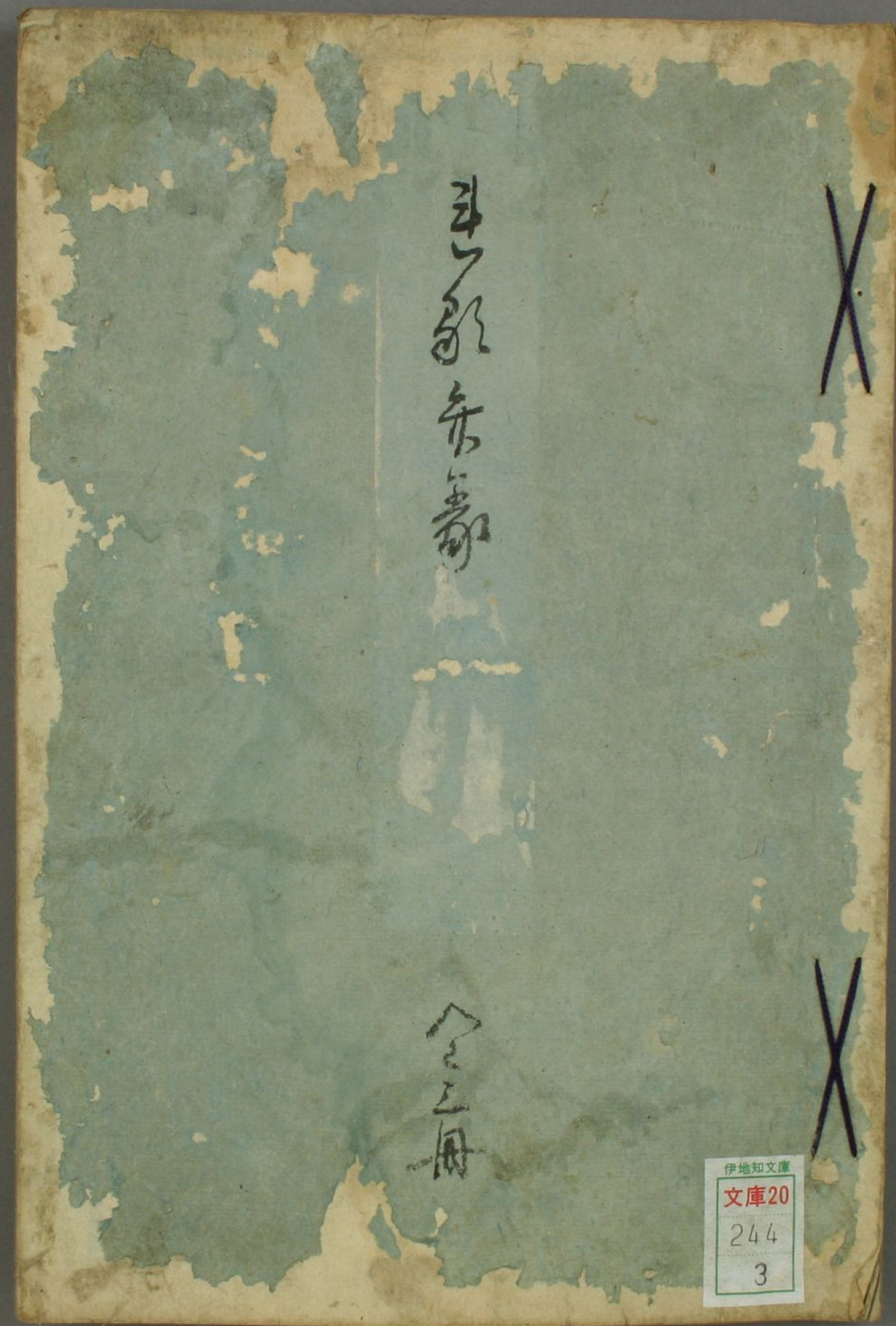
伊地知文庫
文庫20
244
3

文庫20
249

海内一人

連歌難義巻第三

伊地知氏書冊

上小野三

問 連哥本式ゝ新式とゝ分ぶ事 又何時代よりはじまるや

答 連歌本式とゝ第事(ヨロヅノコト)成省略(ハブカ)ず物皆正きことゝなるべし 新式いづれの時代よりか有ゝ式目なれども 本式とゝ成ぬべきの式目も百韻五十韻なども連歌あるべきよりいづくの世にか

昌平坂学問所

○筑波問答に文和とあるは文永の誤にや。文永は弘安より十五年前なれば、文永の比に本式はいできて弘安に新式はいでたるといふべし。応安乃新式のことの問答になきは建治の式に准じて作く

式新式ともに年月あきらかに聞えず。但し旧式古
式ともいふべく、これら式目の出來しは、本式といひ
なるべし、後に来べし。筑波問答に為世の為相の為藤
卿、此等の輩を見て式目を作り出て、当時世にしれし
し。又云、文和弘安時比より、本式新式などいふ事は
できたりと。文和ハ後村上院御時也、弘安より七十三年後也 鎌倉にハ為相卿の藤谷(フヂガヤツ)の
式目ありて、北林と号しく出されたるとあれども、弘安
以前ある事を建治新式抄に、建治二年に為相卿藤谷

是も不審なるべし。是
よしは黄門光圀卿此集
書に見えたり。

乃北林(キタバヤシ)にて作らせ給ふ式目などあれども、新式新たに書し。
建治三年に改元ありて弘安といふ。又文和などいふは
応安五年に二條の太閤乃作らせ給ふ式目より出なり
るべし。文和より応安まで十七八年の後となる。為相
卿は文永元年に生れ給ひて、建治二年には十三歳
に成らせ給ふを、式目作らせ給ふことはいかがあらんといふ疑
ひありしこれは、尋常(ヨノツネ)の人のごとくたとへるべからず。又
其比は阿佛尼公も付そひ給ひて教へ給ひしなるべく

あげつらふべきにあらねどもせめて後世の為世俗の嘲弄も
書とゝめまほしくなんとて後光厳院の御宇延文五年に
二條の大閤良基公 東遊新式ゝ追加を撰ばせ給
まひ後花園院の御宇享徳元年に二條大閤兼良公
宗砌法師等に命ぜられ新式今案をばかゝせ給
ふべきにあらねども宗砌法師申ぶく身病あり後ぶく
に法けはあらずあるべき出来ざるべし後柏原院の御
宇文龜二年肖柏 牡丹花といひ又爰菴ゝゝ云 勅命をうけて連
歌
安弘新式并に追加享徳の新式今案をあつめ給よ
りてせく式目をなせりと今用ゐる新式を見るに先式目
を後鳥羽院の御宇文治建久弘安より順徳院の
建保の比よりやいでき侍るべしと文治元年より建保元年迄
五年迄百八十五年なり其ゆへを舊式と古式とといふべしなん抄本式の
連歌を載十句名殘折表六句玄句ごとに賦物を用
ひ太鼓ぶども新式と遣ふの事ゝ今又本式の連歌
ゝ表すを載十句殘折ゝ賦物をとりて玄蘇ゝ世俗の

連寄より抑此じ考の所まとも金(ニンジン)本式目傳ら称ない
うでいせん只兼裁法橋ゆ称るを絶後と鎌
必宗祇法師の和式の歌をくるを無なすの
例と称又考へ考る所歟し
○追考十六夜日記ゆ阿佛尼公都をたちて鎌倉八下る
まへ〳〵建治元年十月十八日の乃記ゆ四年のこと
海で見へ〳〵ゆ建治二年八月ゆ侍従の宰相乃君を
必へ〳〵五十首の和歌とよみ〳〵ゆ書る

也あへ〳〵ゆ侍従宰相の君
とあるゆ為相の事
又云侍従の弟蒲守の君乃とゆ
二十ゆ詠歌を送へ〳〵ゆ是も点あひてゆ
こゝとをこ海のよ志るべ〳〵ゆ
ゆ云〳〵云〳〵ゆ
十ゆ年ゆ為おゆの弟君
歌式抄乃説ゆ公卿補任ゆ和暦三年ゆ為相卿
七十七歳ゆ薨ゆ和暦三年より

数つまで、建治二年より、二十五箇の所まく、建長四年より
生涯まつたるべし、建治二年より、若相卿、いまゞ鎌倉へ
下りまつり、後、志の影を、建治の式目、藤谷まく、為あつの
作りまつるといつもいのゞ、志の移ゞも、鎌倉にて作りまつ
ばく、小林といつ名あるべくばくもく、新式、若宮卿
の時よりあるを、何佛尼公乃書くへまひしと、
為相卿、鎌倉へ下りまひく後、の式を出しまつる時、小
林といつ名、何佛尼公乃清書なつたやゞく式目の

写とゝかしまつる、何佛尼公はじめ、鎌倉よりせ
し所、身乃やつるふ後、為相卿、鎌倉へ
下り給ひく、たもせし一所を、藤谷といつ、為若宮
義乃後、西北の谷くこの名乃
おくせしあよ志のいつ名なり、十六夜日記より四ゝせゞはゞ
詠ことあ移ゞ、為あつ乃、下りまひしことを、
移ゞ、四年の後なり、建治四年、改元あ
りく、弘安といへゞ、筑波問答より、建治式目、
弘安といまつたゝ志の移を、弘あ乃式といい

細引地

で、建治の式といふハ、阿佛尼公乃、建治よ
りおこりたるなれバ、後よりもかくいふ
なるべし。

問、歌乃發句といふ事、初の五文字をいひ
て、續く二句三句四句五句までにて三十一字是一
首なるを、しかるに連歌ハ五文字七文字五
文字なるを、頭乃句といへるなれバ發句といふ
いはれなるにや。

答　連歌の發句といふハ、百韻五十韻の
ごとく、後鳥羽院之、百韻にもあまた、五十韻にも何れ
なれバ、それの句なれバ、發句といふなり。さて百韻
乃發句、五十韻の表句といふ意之、まことより脇句、第
三句四句五句などといひてしるしみなく行之、今も發句などの
ことある事、昔もいふがよし之、けれど見えたりける日本紀、
景行乃條、古事記仁徳の條などのこと字よみさとりし
あるを見るべし。平句の一句のことを、付句などといふ事

抄物に一條大閤の新撰集よりも是こそ古今雅俗も
本末（モトスエ）をかくべ頭句（カミノ）下句（シモノ）ばかりやの
又問筑波集よりも發句とりけるこのきもの
をの家々の發句集などいかゝいふ
答　或は百韻或は五十韻ばかりの
はの發句を拔書しるゞ多うるゆゑよりこれを
乃こゝ拔書ばかりゞ片かたちるものをもちひく發句
ばかりいふなり

問發句ふるこの形ばの切字を入るものあるを
て平句よりかゝず切字のこゝなきをいの形る
ゆゑふや
答　先切字ふる十八ばかりはかりを八
大まかに二段切心切心切ばかりなるひあるふやい
ばまふと發句ふる切字を入るものをさくる場く
さべしこゝ拔なるひの紀とつく或説に弱ハ本末切字
あよ切字ばかりとこゝのまゝばの形ばよ切字を入るふ

[illegible]れし。連哥の發句に頭だうり京鳥だ切字を入
[illegible]ものを[illegible]ふ[illegible]ば。[illegible]
つよなりとあよ切字を入るべ是を俗へあるちやうで光ハ
[illegible]ひ切字とも形ばかり俗ぐいへば。ことさのむを
乃ちわざにしく。[illegible]俗とするこの稀く連歌
の切字ものこそ[illegible]ばかりにいたるべ。[illegible]
べし。耳底記よ。[illegible]法印[illegible]大[illegible]し。[illegible]仕
やうを[illegible]ひ[illegible]ぬ

ほどに[illegible]や一[illegible]す俗[illegible]おく[illegible]ばかり用ゐなるよ
く人乃[illegible]ばかり[illegible]ばやうよりきれとも
あり。[illegible]切字のこと成[illegible]ばわ[illegible]ひ
しく。先連歌平句乃切字ハ[illegible]ばかりし。發句ハ
[illegible]ばり切字入[illegible]ばかりを[illegible]
[illegible]べし。

問。賦物やうハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ばきもの賦
[illegible]ば[illegible]や。今世物物とて書[illegible]

五ヶ　山何・何路・何木・十ヶ　朝何・夕何・花何・
何人・何船・　花之何・唐何・青何・
白何・手何・
下何・初何・其外賦物の字一字露顕　日火・蚊香・名菜・如此
一字有二字　二字反音　花縄・夏綱・水罪・如此反音　三
訓之類也・二字各成二字有躰之字類也
字中畧　霞紙・菖蒲雨・桂唐・如此有三字訓之　四
字畧中一字成二字有躰之字也
字上下略　鸚撥・玉章・松苗代・橋如此有四字訓
之字畧上下二字各成二字有訓之字也　京
ゆきるるしてるるてゝ色をしぼるべいの形
ちぶりふやや・又古今乃違ひあるや・
答　賦物を百韻連歌あつらへ法よいで

きしるるるゝ・はじめ・應徳院比ふやあらず・白河院の御宇
建久院比より・後鳥羽院乃御宇　建保の比専なり・順徳院乃御宇　志ら
あまをこそ・八雲御抄ふも・賦物乃変ゝくの世語
ひつぎ・扱賦を詩の六義ゑ賦あり・やまとうたの
ふかきをめぐ・唐詩あるゝ・あらうたをして誦ス賦
といひ・擇言とも具説とも・解喩ともいへり・是乃
賦ゑ・くたるふといふ意ゝ百韻五十韻句毎ゑ其物を山何
何路物の名を数ゝ・くでふゆゑ・五ヶ十ヶなど定

ゝゝまたゝゝかゝ、或ハ多獸、或ハ草木、或ハ國名、或
ハ古今集、其他者の名、或ハ源氏物語の巻乃名、或ハ
白黒、或ハ一字露顕、二字反音、三字中畧、四字上下略、或ハ
有心無心ハ、ゝまゝゝ色ゝ、其ゝを賦ゝ、無心ゝ
詠波集ゝ

後鳥羽院の御時、三字中畧、四字上下畧乃
連哥ゝ

むゝぶちきり（塵里）乃、先詠世ゝ

前中納言定家

ゆふ（ツカ 挺頭魚）ぎほの、花ゝ紀宿、詠、露乃ゝ小
却、御、白黒賦物連歌ゝ、詠多ゝ
乙女子ぎ、かゝ（里）ゝゝゝゝ山ゝ、書、ゝけゝ

從二位家隆

ゝゝ色ゝゝい、御ぶ、ゝ紀乃ゝゝ（白）雪
同ゝ御時、源氏ゝ、國の名、百韻連哥ゝ
ゝゝ紀中ゝ

出雲

いはこしのみちの乃露そしぐれ

源家長朝臣

蓬生荒軒端あるこしの古郷

源氏物語巻名歌古今集作者歌

賜物よしの結る恵哉

紅葉

もみちの賀乃錦手葛城の山

前大納言為家

時雨なり比良乃高根の神世自

業

平

建長六年五節の比有心無心乃恵結け

有心

玉の緒ら誰よまく波をうけ法こ世

常盤井入道太政大臣

無心

ちをきぬうたよ形世孫りまよ

此有心無心のこゝろハ八雲抄云昔世人うずにさしてきそとつふ恵哉を世さ
ア[illegible]よ有心より頼貝と付うりよ又ふ[illegible]き世ほ[illegible]あるとふことあ
有しよ有心の中より厳なしきちうし云云仏波問答ニ云有心無心と
て[illegible]ふ[illegible]ち武恵分世ふ粕句ちと海せく小ち[illegible]恵しるも者ニ結り
し世あり凡世心ち何ちも定めぬるとよあふよ有心くり物と定て付
るちもつふるへし数よさして結と八宣よんれ[illegible]ちまて浅かちひ中よ

も数多さだめなかりしかば、あんより〳〵の附〳〵、又ちゆう〳〵、ぞと、ほう〳〵を
取ぶつかるもいかがしとぞんじ、わ〳〵び状付るも、厳ハふまるるもほう
なるもあるゆえなり。古くハ一字露顕一字反音、二字中畧四字上下
略ありしなり。しかるに、五ケ十ケの賦物をいつ〳〵稱し、生ぜ
ざる句より第三句の中を賦物をいつたし、一字あるを、
をの名ハ、日を火乃 あらたてい、ばくふ、ときし、又倭の
賦物をするハ、ろうし、 発ハ多歌を賦るよ
なるべきなるべしとする也 又あ方ようのをする
ばかり、一方よりつまりとするなれし。 発ハたなぎとつ西ハ木よりも第
ばくしゑきぬん、 あとありて生を一方よりつ
御抄乃趣。 此おのふるもさ、ばくしたるある事形うつ、今ハ

あやふきことなりし。何の拵だ、らしくハたるさだ、ばくしたる五
ケ 山何 十ケ 朝何 乃生ハ寛元の比 後嵯峨院 乃御宇 よりはし
の類 の類
まり、文亨弐年比 後醍醐天 皇の御宇 より就く、文和弐年比 後光厳院 ものの御宇
く、井蛙抄云故宗近云、為世 卿 民部卿 為家 弐申しハ、ものの合よ
人弐ものふ〳〵行よハ、まゑの歌の歌句一二句楽して、何木、
何人、何船拵の、掌弐賦よりつく、用意するこ、ものの、
ものふく、五ケ十ケなどの賦物ありしことをたる歟。
亀山院の御時、山城弐國の名所を賦するよ、云歌の

連哥によつ孫乃名所を大かたすぎく。今ハうるす
きのちるは四の宮のちる那ぢやう是名所なるべし
とさる哥し時。

為氏卿

ちきりし乃さやのちるはちるらん

哥ありし乎

隆轉卿

清らうら浪きりちるなくて鶴の鳴く声し

此附すひぬ其体まぎらはしくもの賦物多かりけれん。
連歌初學抄曰（一條大閤兼良公御作）一往古以賦物為題或
百韻或五十韻毎句用其賦物近代發句斗有
賦物之沙汰脇句以下不取之仍雖似無所詮
聊不忘舊儀而已云云又曰賦物之字上古者
百韻之中不犯之中比面八句斗忌之近代無
其沙汰頗可謂無念仍近年者至第三句賦物
之字斟酌云云むかしの路の歌乃如く山も路

ゆゑに、強物を定て、ゆきまより農句をばよろこべ、今
を第二はぐくもいでき、後、賦物をば、ゆゑ
ゆゑに、おもき題用をたづね、太緣（サリキラヒ）附、ふかくも、
ゆゑにとくたづく、二句の心もとのうち、詞をやびと
きば、賦物を合すれば、中くいあへよ、ゆゑに、
るゆゑにあつまぬべし。

問、今は連歌の附合、ゆゑに、附合（モバラ）ゆゑにて、又附
合とて、素にうる物をいふゆゑや。

答　連歌（アミツチヨツノモノ）の、地筆物は、附合ゆゑ、
いつもゆゑにいづまを附合とさだめんは、よく者べ、
ず、志ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、前句ゆゑ、一句
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
附合をもて、扱一句ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
合ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ひゆゑ、ゆゑ、附合ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

きまへまくろうをも好みて、言葉をもいひならべて、付んと
おもふとしあらば、附たハ、あたかも魚を得る筌のごとし。
魚を得れば筌ハ捨るがごとし。詠哥大概云。定家卿作なり
情以新為先求人未詠之心詠之云 云 寔に古詞を
しへずして連歌をも云おかしくのぶべし。凡連哥のよく
附といふハ、一句附てよろしく、又前句に附るよく附とあり。
連哥ハ雑にも継ぐる二句を合せてつけなるら 志のさは人乃いまだ詠せざる心を
求て附るに、無く附合をも定めるべきにて候

あるべし。八雲御抄云。歌ハ遍く連歌ハ心ぬき潮にぬき
句し侍るなどありけれども、亦附合によりて定め申の
だにけらぬさ歌よむよふし附るとなんべけれバ。落書
露顕云。今川了俊作 一むかしハ詠めよみて付しやらん。頼之
朝臣ハ家にて乃一出ぞ
横川にもはなれ小野ハ山ざと
といふ句に
杉は木を炭ヤ焼さぬるけぶり

少安盛入道の仕とりしいうにぞや法眼よきこゝ
ろさまにも一向寄合だてのうちゝ面白あるよ和歌よ
るべし云云又云少納言の連歌ゝ三百句ゝ
ちをとゝのへしく柱をめぐるごとくふする形容
志ゝゝゝ三百句を形容よ和歌ゝ能者だてゝ成
書のへ侍まてのしゝ形容ゝのぶけて結しゝ物ゝ
寄合ばかり用のしゝゆゑよゝ寄るまく詩の出来
らざるゝ由を記云又云むのしゝ善何とゝひろる連

歌の上手ゝ物子ゝ救濟順覚信昭十佛上手ゝ
しのども寄合をもゝ物まく面白きゝ法乃ゝ寄合ゝけ
ゝあよ故濟一人を按政家の良基公御師堂定めゝひ
ゝゝ和ゝこのやゝと見ゝゝゝ又心敬僧都云中比ゝ附
合ゝゝ大ゝゝ兼ゝゝゝ物ゝゝと定ゝ寄ゝ句
乃ゝてゝ小をゝの沙法ゝ寄ゝ面ゝ取合ゝ結ゝ牛乃白
のゝゝゝ花ゝ物ゝ和ゝ梅ゝゝ紅葉よい鹿時雨屋ゝ
古郷田樹よいむのしゝ郭公老よい昔いゝしゝ世よい身を拾

る。晴には鶯。夕には鐘。のやうに大むね似たる事を前句
の心の餘薫をわきまへずして付る類ひは満坐同心なる
句は自他共高名のごとく侍れ。中略　いつはりに堪
能ても同じ心を案じ合侍る事本意なくや。満坐
各あらぬ境界を案じちがへたる作者の粉骨なる哉。
古人は連歌にかく

こゝしきは田をも又こゝろの末

善阿

あしひきは山に外精の夜を来て

こ山乃まへは見わたりこゝ籬の中春

救済

雨はけさの霧ぞふかく身にそへて

花ゆき山乃松くれ来にけり

世は捨る人はあるにまかせて

さはつのはるかしいつま相乃杯

良阿

捨し世の花をだに誰かをしむらむ

すげは小笠破れかぶけにも梨

順覺

いやしきも詠のあるこそ身を助く

うたよまきやうぬ人をも助け

良阿

かり初の浦くらぶんなき旅枕して

馬かりて路求て京へゆかむ

救濟

早川乃岸にかゝりしはわたし舟

此あたりまかりさうひにつけんにも附合(モハラ)をのこ

かはうけく学んにも百年(モヽトセ)をぬるゆゑもつくる哉

得べうくば角田河物語に

権大僧都心敬

細らば陳棟下はきゆる木のくれく

きよ様椿くし江ちはくきぬ槿

宗祇法師云此句更よき句なあひしらひ玄旨くゐ上
下を云合て見まほしうはかりなくみるやうにしこうと
又きこゆることなるべし云又云意述懐なるの句何
のまり合も入べしばしばきの所も学益ゝ人をよく
とり入て句よ部と附侍る無上第事く
夏うぐいすとも わうぬあけがた乃
月よ哉花ちる世の物あつて
こうやうに句を結ぶ幽玄なるもよすべく侍る

見もとり合ぬ所をあはせ仲林集よ
雪独うく 冊ふるさとびしく

宗砌法師

鶯よびぬ やまの人もしまき 庭をみよ

此前句附合ふまいたゞ多孤峯の桟 鶯乃お山
の原 京ぶゝあるべきを 雪うぶ 孤さびしき秋
小 獨京のめわびしる哉 忘人もさまの 月ま
よ下知しる詞侍ぶきたんうれし

杉たゝへばいとゞ深きるいあり

権大僧都心敬

世之秋角ゝ見ずきりぎりす中ぞこのし
はの句も附合なりしば秋代又ゝ数角ゝ鳴ぬ
者べしゝ一向(ヒタスラ)よゝ我中の絶よりしいふし
へゝ見ぬさゝざりしものゝ心へて絶んゝ社
うゝとゝ鳴る鐘情うぎゝ京ゝの明ゝ老葉
集下

花ゝゝ咲ゝ咲ゝいばくゝよ咲まるゝん

宗祇法師

尾上下ゝうすむ松ゝ初ゝゝ
ゝ句ゝゝゝすぐゝゝいばくゝよゝ咲ゝゝやらん咲
咲乃ゝ春ゝうゝゝふゞゝるゝ尾上ようすむ松乃
花ゝゝゝゝゝ見ゝゝ咲ゝゝゝ春ゝゝるも
のなるゝゝうすゝ松の初ゝゝゝ咲ゝ乃ゝ春
らんゝゝめづゝゝゝ附く謀ゝ除ゝうゝゝゝ及ゞ

そのほべ〳〵はく付し後よりうかとおもへども花ち
らすうぜよ尾上の松乃高あめく詠とおりゆるる爲き
事く句成京して後よりおのゝ〳〵附合ふうるかも
よし然ちく すぬよ尾上弟松の高ひく遠く附合を
まうけく後句成京するあく〳〵あ弟境ひ雪よく
羅へきる爲し

宗祇法師

蛙ほさのひで松あち弟あち

籠乃うち成已ごやゝつとる弟稀く
此付の意なるに成りて附合とくあるべきなる句
らず季句の蛙るさのひで松あちまひるとふを附
合ふくき古つきよ旅弟宣又き意所ごふくあるべき
を籠乃うちの高成附しまく〳〵ふ雪奇跡也日の蛙
弟境よ京ひ高弟やどりハづくよ求〳〵ん雪ひとふ
さへもあち弟あるようぼくの籠弟うちを已ごやど
乃雪松ちひく やきげふる乃稀くるさ海ひりへし

秋あらまほしき心ばへを姉うへも併せ思ひよるべく
味ふべきなどいふ乃句なども人を伺ふ事を兼ね
たりおくれ侍べし

雪路 そのかたち 秋乃手ゆゑ

宗祇法師

山遠く月も入野に鹿ぞなく

是も人麿哥よさをしの乃入野のすき初尾花
いはしこのつとゞ手枕まきん野云々をより合ふく審
さう錢も山遠く月も入野と結ぶ枕法
ずよい此影のよく合ふ秋なるかたおもお句をよく
くれなゐひき過へく併せるものゆゑ手枕野
いつよ花ずよ附合ぶくみるものゆくいさらに
秋し此お句を已附んと枝を見て有ればとりよく
くさはなし

夜姉のよ山よ地とふいふ〳〵へ

宗祇法師

越ごろに羅小そう称乃多もしの称
是古史記ゆうよめるに小孟嘗君とつふ人函谷関をいでん
ゆきしに時夜あらくて羅鶏鳴さばりをまば孟嘗
君よりもすぐれし客ありて雞のなくまねをせしに
関ゆ門乃多もしあくさるまば羅鶏鳴一名を
清少納言もそのそう称をもよめるなり扨乃
附乃意も同古事に物原に山より出るをいふ〳〵ゆゆ
物よ越ごろよめる羅もまぎれなきまで由あるべし

一あり〳〵古雞の海称しるものもありしをふい出る
さ海あるを物ゆのし杉をふいふ〳〵といふよ多ゆ乃
あるを小ゆ鶏附〳〵まてるふく意のあるをしふ也
連歌新式云用本歌用古事之條重畳可有斟
酌云云又云えをの多くをばゆ歌をば附合よ詠む
べうすとも見さうり多さ人の多くをばゆ詠
合よあしゆく況古事ゆ物ゆ乃ゆ乃ゆ後得あるへ
きすく古今集真名序よも語近人耳義慣神

明也。学行ともに学こうさいなるすぐれたる宗長法師
乃古瀬新水なるべしとぞ事をおいぎとして人々
奇特学心いまだ学ばざる前を京都ぬ頃を法うひあ
らくしきことふどをいひ出る事ひさしくおすふ
ひ学いへり。雖も俳合として書るものふる人のおろ
ざることをのこむ称として弱を耳ばかりをを
おるし。唐絵書まぐ学くを学ぶ虎は禅乃俳
合ぶ学めづらしきあどとてやすめと是ら式の

うへふもとも迷弱絵をへ人ふるあらぬさとぐもるり。
学ぐに宗砌法師心敬僧都ふ学ふ宗祇法師などの。
迷弱の俳絵をまねびて。はこふるうよくわきま
へしる歴き京事

問。うけ合絵連哥ある人のんさ俗ぐなるこバ。
ん句を事やけ学事を好ふむつうき白の
こあらんふ学ふいうぐんるく附べきや

答　うけ合事ふ時よ乃ぞこて附うる

人得もつのん先ゝ土手なる祢だゝかうぐつのかさ哥風
ふべし

いく秋のへし桃浅えし元哥

宗砌法師

妙る宮殿園の名ゞ付ふ銭桑

此句ハ西王母の古事ゆゑすべく難句なるを附
句の意ハ源氏物語の名所の姫君ハ桃園の式部卿
乃宮殿御子ゆゑ此句ハ此ものゝ乃意よすゝ

まひしうたゞ前句の仙人(ヤマビト)を引あて附まつりいく
秋うへしゆゑ時意ゆゑすこしもたるまゞ人間もや
びゆるゆゑ物ゝ哥ゆゑ又宗也法師云角(ツノ)をしてく
ゆゑ句出く武蔵うしき城行助法印ハ盃を附
ら稚き盃ハ角ゆゑいぐらゆゑもたるまゞ
皆上手のうへ乃事ゆゑ難句ゆゑ時ハ唯あと
の付安さ孫よのゝまゞ宗祇法師云者やけ句
一句出く清ゆく五六句もゝまゝ乃ゆゑ

ゐる絵くゝ形るくゝとのまひし・やるゐもこうくみもやきうゐる
せんと物をひてもお句よ附ふとの句の稱ゝむつうしく
いふるを弾くゝ紹巴法橋もよく案ずるハやきくせんるくゝこゝ
問・片句よ一句ハ附る連歌ハ百韻五十韻の
連歌と書ひあるや
答　片句ハ一句を附るも百韻五十韻ハ
どの連歌とくく書つゝあるハ書ハ
あるものなるべし・先片句ハ一句を附るよりハ
勝負・一ふる・先後のはし合も形くゝ人数連歌の数
なる稱ゝ人をもゝ数くく詞をもゝてくゝ前句数意を
おこし・又引ゐくゝて付るゞよりハ付ゝ書の句
よ秋を附夏の句ハ付ゝ雜ともにあらぬハ
海より引ハ附るくゝ今一八百韻五十韻数書ハすゝき書
ハ片句をゝくゝ付るハ書秋意ハ数一句二句よ
て捨ぬるのなるしゝ書の句ハ書ハ書乃句
を清書・秋乃句よ書ハ秋をつけ・意ハ書意を附くゝ

ぐひこ又百歌五十韻の連句なり大概百首独吟なるべし
ゆゑ一首くよめうくばそこの弱とくかうかうする
きゐけまどとも百首のうへおもかてに杉の下さ苔乃ん
紙の法ぐきさらんいあしるべく連歌も百歌五十韻
乃ちこひよりけぐ一やたちうよおもに法けうる玉雲雲
杉をんいやと句とくきらく雲くく次独句の附やに
うんやうよするくく隅田河物語ふも宗祇法師の作なり連
歌百歌おやくくきるぐしくく通り作んを

うんようくこ云宗長法師云表の五句目七句目ハ
らんとめうく作るとくいを是くより片句ニ句附
る連歌よらんいめあんよきとつふよる作歌の
表八句のすぐ弱いへるふくもるべ一人いこのけ合
乃百韻五十韻の連歌ふも我句を附くく又多句ニ次乃
句を附くくいうふも附やたのうんいを物ち人を其句を出
し次の句弱附ぐこうし冊とれりふもくやとさ句ニ
ても出さぬ事くひあり井蛙抄云後嵯峨院の御

時御書分者しふひやーきぶう云句ヨ

ほゝゑむく　そふ弱るうげ　ふくまたどう

ぶいふ御製附くく後雅句あく連歌法うずーく從

者る間雅句をーて及達亂時句可ニ返給之由有動

定ーホ民部卿入道為家　そまそを可ニ為撫民御事

乃由ヤさる　ぶまあり　ぶうの　ぶうにあるぶや御

製すう　移さうく　ぶふそうくみも　迷弱ちあらかく

やさうにするがよきく又百韻五十韻弱連歌

つけのくるけるすふく打越ちぶよ大切く連歌新

式ヨ韻弱字の事をあげ　ちぶ次ヨ直に輪廻弱事

のを弱へーて　輪廻とハ打越　迷弱ちうち越あーの連歌

ニ句の濁あり

百韻五十韻ちなしぬゆ恵ちあり　あくあく片句ヨ一句

を附ぶふ歌五十韻の連弱ちちまたのひあくを

ふへーさちけのまぶ百韻五十韻弱ちちより連弱

らちくちち片句ホ一句附ーよ句をーふを句ー

問清輔朝臣弱袋草子曰云云凡得名

人中ニ支云出ヨリハ遁避一支也有歌
合之比長元歟小式部内侍入歌人之
時母和泉式部為保昌妻在丹後國定
頼小式部内侍局前立寄テ云イカニ
丹後へ人ハ被遣候哉未飯參歟ト云テ
起時式部取直衣袖云大江山いく野の
ちの遠けきハ踏こゝろも見ぬあ戸乃
ちゝ立定頼郷ヒキヤリ逃ト云云六月

中入秋節之日關白殿下遣俊頼朝臣
許歌云こゝ乃ゑ島の月ハ見るものゝ
ぐゝ乃ぶべきやゝ秋乃ゝきあるゝ
秀哥ゝ劣返支ハ不云是故實也如
此之輩不為恥辱歟云云連歌ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
答　連哥ゝ頓ゝ

院の法付黒男堂いつ編姫さ遠戸小海力さく簡戦
者きそふよ

黒男さ後戸のうそよ書すの梨

堀河院御製

大納言國信俊頼卿京ぜ御前より伺ふと附
まうさでつけ李八雪沸物よ赤之像よ四条宮松
もしけるに良選ゞ
をみな系乃ふ稱くうゐる之の稱る

ぜいへるよ厳上人皆逆電も真實ふるあくうる如事
うむこうも今もよくさうけらまあ拝ぶげ雪
ふぜうう多し宮よわる大変なふるくぜあり彩よ
つも大変ふるとうう物のふく尤ふ後人自
厚くすとふ梨

問連歌するふんづけいうづすべきや

答　連歌ふんづけいうづすべきや

つふ厚くもかくぐやまぜ者みるけうあ

かの姫ゝよりつゝるまぐ、そまづんまゝ
あゝど、さこのひまどもあまりて弦戈をまふもようばるを
ゆゝをゝ奇の教ふもゝゝう宗教法河云世をたづさ
りて待ん人をまづ冥加ぜもつべゝいふも位言玉津
しまをひつぶまりとく直ぜあげ海づまをを和よ自他
不二乃扶を見をもりて人の師ともなり人乃中よ
ゆゝと彩りとく弱よ土手をるり待ん出ゆを頼つべゝ
云云世ゆゝうりをゆゝよ杖をひとすもどゝ公づくるよ

ちくさゆゝちるべゝ大和姫の世紀ふも弥乃垂ゆ祈禱
をゝとく先ゝ冥加ゆ正直をとくとくすゆまり歌ゆ
大概云歌よ師匠乃ゝ人我をく師とゝ法ゆ生河とゝ
へよ心正直ゝ称ゆ云歌をいうよかぎるゝも物やかおよ
ゆゝ彩るべゝ迷彩の人ぐけハ人ぐ冥加ゆ正直とて海さ
まふゆゝあゝど

松乃ま若き附ゝり彩ゝす世道をゆく海づけぬま
ゆゝをゝとゝりの人姫よ戈姫くゝて、ゆひど海晴やゝ

ばゝ多く孤年月と送つるぬ。さつれよ十とせあまり
のほどゝ。うけまくもかしこ。拙ほやを孤れほせ
ぎ。ゝ成業ゝと。連歌を家乃業（ワザ）とでなり。ゝる海と
に身ゝ。彼の山を屑ゞめく。ゝ。嶽ゝ海をたゝの
れをゞひ。ゞ。身をゝ。ゝをるあさんゝ。人
孤ゝ。ゝ成もわゝ。海ゝ。ゝ。屋ゝ。ゝ。
ゝけまゝば。ゝ。孤古ゝ。ゝ見ゝ。ゝ。ゝ孤
ゞ中ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

かゝゞゝ。ゝ。問孤海に答ゝ。ゝ。ゝ。人正直乃（マスグ）心
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

連歌辨義巻第三終

阪昌周所著之連歌雜義之巻一覧畢道之
權輿盡于此書可謂後進之規範也于時明
和六年冬十二月書於江戸旅館矣

花下
法眼昌桂

穂積明俊謹書

明和七年三月

京都書林
堀川高辻上ル町
植村藤右衛門

江門書林
本石町三町目
植村藤三郎
堀江町二町目
丹波屋理兵衛

傳芝子我